

「証言」の力学——「原爆文学」の1970年代

成田龍一

はじめに

2015年は、原爆投下から70年目の年となる。村上陽子『出来事の残響』（インパクト出版会）、柿木伸之『バット剥ギトツテシマッタ後の世界へ』（インパクト出版会）、直野章子『原爆体験と戦後日本』（岩波書店）、柴田優呼『ヒロシマ・ナガサキ 被爆神話を解体する』（作品社）、四條知恵『浦上の原爆の語り』（未来社）などの力作が相次いで刊行された。年末には、岡村幸宣『（原爆の凶）全国巡回』（新宿書房）も出された。

いずれの著者も、原爆文学や被爆体験記、原爆画として書かれ描かれ、読まれてきたテキストを、あらためて大きな文脈でたどりなおし、読みなおしとらえなおす営みを実践している。記憶の時代に入った原爆経験を歴史化するための営みが開始された、ということであろう。

「戦後70年」といういい方には、いまだ過ぎ去ろうとしない

「戦後」の影があるが、いまや「戦後」の歴史化の前夜にさしかかっていることがあきらかである。こうしたなか、あらためて原爆文学を考え、いかに読むか。このことをめぐって、あらたな営みがなされている。

原爆の語りといったとき、原爆文学は、爆心地からの距離、目撃者と証言者の弁別、作家とその特権性の検討、被爆者／非被爆者（当事者・非当事者）の差異、そして核兵器・核エネルギーといったことに敏感であった。原爆文学は「文学」として記述されつつ、外部の参照系・「事実」の参照系といった問題系をもつ作品群として扱われてきた。「事実」に立脚し、私の経験の記述を遂行しているとされ、私小説に近似した読み方がされてきた。

すなわち、原爆文学をはじめ、原爆の語りは「戦後」に抗う問題意識をもちつつ、「戦後」と相補する関係でもあった。しかし、このことが、いまや、議論の出発点となっている。

原爆文学は、「正典」の体系化と「原爆文学史」の確立という

方向で歩んできた。原爆文学の体系化という観点からすれば、『日本の原爆文学』（全15巻、ほるぷ出版、1983年）が、その里程標となることは疑いがない。『日本の原爆文学』の刊行により、原爆文学の地平が見渡せるようになるとともに、その枠組みが定められることになった。『日本の原爆文学』は、原爆文学というテキスト群を整理し、意味づけ、さらに体系づけた。このシリーズは、原爆文学の文学史がつくりだされ、正典が示されるところにも、作品が手に取りうるような形で提供されることとなった大きな事業であった。テキストの入手ということとあわせ、計り知れない大きな意味をもつ。

『日本の原爆文学』については、編集に携わった編集部員から詳細に事情が明らかにされており、このシリーズの成り立ちがうかがえる（近藤ベネディクト「元編集者が残す『日本の原爆文学』全15巻の記録」、『原爆文学研究』第11号、2012年12月）。いってみれば、『日本の原爆文学』により、「これまで」があきらかにされ、課題は「これから」先を考えていくということになる。

上記のことは、ことばを換えれば、「原爆文学史」の生成が、『日本の原爆文学』の編集委員を務めた長岡弘芳、栗原貞子、黒古一夫らによってなされてきたということでもある。小田切秀雄編『原力と文学』（講談社、1955年）にはじまり、長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社、1973年）にいたる営みの結晶である。

黒古『原爆とことば』（三一書房、1983年）は、「被爆体験をベースとする『作品』の群列」として原爆文学を定義し、その「系譜」を探る。黒古は、書き手について、「被爆体験」者と「非直接体験者」を分け、「観念として原爆およびその後の地獄の出現を処理で

きる者とそれが不可能なほど感性和思考の奥深いところまで原爆に冒されているものの違い」をいう。そして、記録者・大田洋子、表現者・原民喜、告発者・栗原貞子という規定と、その系譜をいう。

現在営まれているのは、こうした『日本の原爆文学』にみられる整理を、あらためて検討することである。原爆文学の定義と考察に対する再検討であり、脱構築の試みということができよう。問題化の系譜を探れば、いくつかの動きが浮上する。まずは、原爆文学研究会（2001年12月発会）と『原爆文学研究』（2002年）である。その中心となり、問題の核を論じたひとつが、川口隆行『原爆文学という問題領域』（創言社、2008年）であった。原爆文学における「正典化」の欲望と構造を解析し、川口は「原爆文学（史）の起源にはナショナルな欲望が充填されている」とした。

異なった地点からの発言もみられ、ジョン・W・トリート『グランド・ゼロを書く』（Writing Ground Zero, 1995; The University of Chicago Press）は、原民喜、大田洋子、大江健三郎、井伏鱒二、小田実らの作品を分析し、「生存者による事実の報告」→「被爆者を取り巻く文化を描き出した小説」→「核時代」の不安にかかわるような、主流的な文学」という推移を指摘した。また、長崎にみられる「周辺化や迫害の伝統的な様式の下に横たわるもの」の影響も論じた。

他方、米山リサ『広島 記憶のポリテクス』（岩波書店、2005年）は、「核の普遍主義」と「歴史的、構造的な特異性の承認を求める声」との「摩擦」——「普遍主義と特殊主義の相互補充性」の批判をおこなう。「証言者」や「語り部」として自己を同定する

ことで、語り手は移り変わっていく相互の影響や重なり合う社会的諸関係のなかで、自身の主体の位置を表明し位置づけることができるようになった」と主張する——「しかしながらこのプロセスは、何を証言するのか、誰のために証言するのか、そしてなぜ証言するのかについての新しい理解をとまなうものだった」。

有末賢は、こうした米山に対し、「証言者の「被爆体験」そのものよりも、「その事実をどのように語るのか」「どのようなニュアンス」で聴衆に伝わるのか」に着目している、と論じている(浜日出夫・有末賢・竹村英樹『被爆者調査を読む』慶応義塾大学出版会、2013年)。こうした、原爆—原爆文学の語りの再検証の営みに、私は「長い1970年代」を検討することにより、参画したい。本稿はそのための最初の試みである。

1 福田須磨子『われなお生きてあり』(筑摩書房、1968年)

長い1970年代は、「証言」と「調査」の時代であった、とあらためていいうる。たとえば、秋月辰一郎、鎌田定夫、内田伯らによる「長崎の証言の会」が1968年に発会しており、『長崎の証言』(年刊、10冊、1969年)、『季刊 長崎の証言』(12冊、1978年—)、『ヒロシマ・ナガサキの証言』(広島と連携。季刊、21冊、1982年—)、『証言—ヒロシマ・ナガサキの声』(年刊、1987年—)などを刊行していた。

さらに、広島・長崎の証言の会編『広島・長崎30年の証言』(上下、未來社、1975—76年)、鎌田定夫編『ナガサキの証言』(青木書店、1979年)、『被爆朝鮮人・韓国人の証言』(朝日

新聞社、1982年)なども出される。

民間の動きに対し、官の側での動きもあり、厚生省原子爆弾被害者実態調査がなされ(1965年)、広島班(隅谷三喜男、中鉢正美)、長崎班(石田忠)として活動をおこなった。しかし、構成員はそれぞれにこの調査(「40年調査」とよばれる)に不満もち、批判する。

1970年代—「証言の時代」は、こうして、被爆者の証言の「正統性」、証言がもつ「真実性」、証言の力の確認と確立がなされていく時期となる。

こうしたなか、ここでは、福田須磨子に着目したい。1922年生まれの「戦中派」である福田は、いくつもの文章を残している。なかでも、みずからの「証言」—記録として、『われなお生きてあり』(筑摩書房)を、1968年に刊行しており、同書は広く読まれる作品となっている。ここでは、同書を軸に考察してみよう。

『われなお生きてあり』は三部構成をもち、福田の被爆—原爆投下の瞬間とその後、さらにその後の福田の生活史と、運動への参加が叙述されている。本稿では、ちくま文庫版を使用し、行論に必要な限りで内容を見ていく。まず、【第一部】は1945年8月9日を軸とする日録—被爆記となっており、惨状、救護の様相が記される。

【第一部】の冒頭は、「原爆の長崎」として、福田は自らの生い立ちから記す。長崎の商家の娘として生まれた福田だが、1945年8月9日は、長崎男子師範学校の会計課の課員として迎えている(「徴用逃れ」と自ら言う)。むろん8月9日が記述の中心であり、この日を基準に前後の日が、意味づけられる。その規定

と記述の量とを合わせ見ておけば、以下のとおりとなる。

8月8日(その前日)7 p、8月9日(原爆投下の日)15 p、6時40分、7時20分、10時50分、11時と小刻みに時間も記す。負傷者の惨状を描写するが、「臭い」を書きとめる)、8月10日

「その翌日」14 p)、8月11日(その二日目8 p)、8月12日(原爆投下から3日目)4 p)。

8月12日午後以降、「大村海軍病院」の項をたててからは、これまでの時間的記述が、(病院という)空間の記述となる。8月13日には、被災した自家の物品が盗まれ、そのことに触れ「持つて行った者は、私と同じ日本人であろう」「敵国人というなら話もわかるが、日本人同胞から、そんな目にあわされようとは！」と書きつける。なお、『われなお生きてあり』には、朝鮮人被爆者の姿が書きとめられている。注意を払っておきたい。

【第二部】は、1946年2月―52年10月くらいまでの「漂流」の時期の記述がなされる。「漂流」というタイトルのもと、「いきなり原爆によって、一切のものを失い、住む家も焼かれて、丸裸同然の姿で、世間という荒波の中に投げこまれてしまったのである」という経験が記される。「一介の漂流物にすぎない」という認識を、福田は書きとめる。

「焦燥と不安」をもち、H小父のもとでの(姉とともに)農家暮らしをおこなっていたが、1946年3月、福田は姉とともにH小父の家を出て、長崎に行く。姉は、雲仙の観光ホテルにいくとするが、福田には「反米感情」があり、姉の雲仙行きを押しとどめ、自身は警察代書事務部に勤務するエピソードが綴られる。同年6月に「全身にひどい疲れ」「体がだるいので一日中(ころ)

ろと寝てばかりいた」といい、脱毛と衰弱―原爆症を示唆する記述が登場する。後述するように、原爆による身体的な被害がこの証言の柱のひとつとなっている。

「原子病! 原子病!」病院を出てから、ずっとその声を追いかけてくる」「すれ違う人はみな、私と同じ日本人なのに、まるで言葉の通じない異国を、たった一人できまよっているような錯覚におそわれた。

この時期、福田は長崎の「常盤町無番地帯」に住み、「アネゴ」時代を送っていた。1946年9月、朝鮮人(張本)の営む古物店に勤め、屋台店のヤミ屋に従事する。このあたりの叙述は生き生きとしており、無頼派としての生活が活写される。1947年6月、大金を扱うものたちを見て「私は真面目に働く意欲を失ってしまった」と記されるが、波乱の生活で、ブローカーを生業とするなか、多くの居候たちを抱えていた。

【第三部】で記されるのは、1953年4月以降の福田の行動であり、「抵抗」への飛躍、被爆者としての「自覚」――すなわち、政治への関心と関与をもつことである。「政治」への参加―「詩と仲間たち」との出会い―「原爆症」の自覚、という三つのことがらがわかち難く結びつき、この三者が福田の生活の軸となり、そのことよって、福田の生活も大きく変わってくる。

「政治」…ピキニ水爆実験の被曝(1954年)による目ざめ(自覚)と、1955年の「飛躍」が、まずは記される。いくらか長文であるが、

昭和二十九年三月一日のことであった。第五福童丸がビキ二で被災したのである。今まで何となくブスブスくすぶっていた私の中の何かが、一ぺんに燃え上がるのを覚えた。

私を苦しめた病氣も貧乏も不安も決してただそれだけのものではなかったのだ。しかし今まではそれが何か私にははっきりつかめなかった。今、私の目の前に、今までもやもやしていたものがはっきりした形になって現われて来たのである。私の苦しみは原爆に通じていたのだ。そしてそれは二度と繰り返されてはならないものであった。私が目をそらし、対決を避けていた原爆の姿が、また牙をむいてしかもまた日本人の上に襲いかかったのだ。私の心の中に形をとりはじめたものは怒りであった。この不当な事件に對する言いようもない怒りであった。私はその怒りに幾晩も眠れない日が続いた

と記している。記述は「原爆を作る人たち」を「大量殺人を企てる人たち」とし、彼らへの「憎悪の固まり」を記す一方、自らの生活苦を語るようにもなる——「社会機構のひずみやそのしわ寄せはみな私たち下層階級をねらって押し寄せて来るようである」。

「詩と仲間たち」…原爆への自覚をもつにいたった福田は、詩を書き始める。1955年8月、「ひとりごと」を『朝日新聞』「ひととき」欄に投稿し、そこからあらたな世界を獲得していく。もつとも、福田は「そのころの私は、明けても暮れても自殺する事

を考えていた」といい、「絶望感」のなかで、「死、以外に安樂の世界はない」と確信していたと述べる。そこには、「原爆症」が大きく影を落としていた。

「原爆症」…福田は、1955年4月、エリテマトーデス（紅斑症）を発症する。高熱、食欲不振のもと、「夜眠る時、このまま永遠に眠っていますようにと、それだけを願う私であった」。

「私は「原爆患者」として治療を受けることになった。原爆患者というおそろしい烙印がべったり押されたようであった。「その世界は、普通の人間としての欲びや人並な希望を抱くことを拒絶され、黒く塗りこめられた絶望と孤独の世界なのである」「今までの生活もこの意識から逃げるための闘いの連続であったと言えよう。だが烙印を押された私にはもう逃げ場がない。誰にも救いを求めることも出来ない。なぜ、私の体は原爆という悪魔に魅入られ呪われたのであるか」と、「原爆患者」という意識を書きつけるようにもなる。体調の不良はすでに散見していたが、この時期にははっきりと意識し書きとめる。

死（自らの症状と治療法について詳細に記していく）と詩（外部との接触をもたらず）が、福田の世界であった。

こうしたなかで、福田の「自覚」が記される。「生きるとは、かくもきびしいものであったのか。生きるとは、不可能を可能にさせる魂の闘いであったのか。はじめて目が覚めたような思いであった。……私は自分のいい加減な生き方が、恥ずかしくなった」。「今まで人生というものを真剣に考えてみた事があったのだらう

か」といい、「長崎生活をつづる会」（1955年5月創立）と接触し、詩集の刊行をおこなっていく。

福田において、「自覚とついでまわる原爆症の生活」「政治と代表制と記述」が一体となり、この総体として「証言」として、『われなお生きてあり』が綴られる。

そのなかで、被爆者の患者「津山の死」は、重い意味をもつ出来事として書きつけられる——「もし被爆者の完全な援護法が制定されていたなら、あたり若い生命を失うことはなかっただろうに——。私は数十万の人間を瞬時に殺傷した原爆が、十二年たった今もなお後遺症で人を苦しめ、とどのつまりは生命を奪う強い力を持っていることを、あらためて思い知らせたのである」。

そして福田は、「津村」が「ひびのはいつた弱い斧」で立ち向かおうとしたのは、①「巨大なきのこ雲」、②「それを生産した現代科学の叡智」、③「それはそれを人間の上に実験しようとした一かたまりの悪魔の群」、④「傷ついた人間を助けようともしない日本政府の怠慢」、⑤「破壊されたものが何であるかを知ろうともしない世界の人びとの無知」であるとした。

「津山の死はビキニ事件で深く私の心に沈んでいたものをよみがえらせ、引つ張り出した」——「私に課せられたもの、私でないとも出来ないもの、それは被爆者問題を世に訴えることであり、戦争をなくす努力をすることである」。

自己の役割を、あらためて福田は自覚した、とする。だが、そういう端からの生活苦で「一日一日が飢えとの闘いであった。例の関節の激痛は相変わらず私を苦しめていた」。

かくして、【第三部】では、自覚の背景——組織——政治が綴られるが、福田の証言『われなお生きてあり』の特徴は、ここから一気に、あたらしい人間関係（サークル仲間、「梅田さんをはじめ多くの人たちの厚情」）が記されることにある。生活をともにする「岩下」との確執はあるが、あらたな仲間たちは、政治向きのこと（第四回原水禁世界大会に参加し、「自分自身が世界に通じていることを開眼させてくれた」——「当時は砂川問題、百里力原基地問題、沖縄の問題で世の中は騒がしかった。私自身、少しずつ被爆者の問題を通じて政治問題にも目を向けていたが、自分がいかに小さな殻に閉じこもっていたか、またたく井の中の蛙、大海を知らずであった）に関心を寄せ、参加していく。

『われなお生きてあり』は、原爆体験の記述から、「漂流」という過程を経て、いまや政治に目覚めた福田が生き生きと活動する内容へと推移する——「サークルの連中とは政治問題や社会問題について話し合ったり、どこかで大会があると人形を持って行って売ってもらったりした」。

そして、1959年「広島で開かれた原水禁大会の報道も、私には納得いかぬ事が多かった。どうも私たち被爆者の願いから少し離れたところで揺れ動いているような気がしてならなかった。私は全国の被爆者たちがもつと強くならなければ原水禁運動が正しく発展していかないのではないかと真剣に考えるようになった」とも語る。

福田は、実践的に動き、この時期には「地域単位の組織」をつくったようでもある。さらには、のち1960年2月「毎日のように安保条約をめぐる報道が流れていた。日本全国が揺れ動いている感じであったが、私にはまるで遠い感じ」であった。しかし、

退院後、新安保条約が5月19日を経て、成立するなか、「私は街頭に立って「これでいいのですか、皆さん！」と呼びかけた気持ちを押さえかねていた」という。

同時に、「原爆症」による体調不調の記述も増える。1959年10月、福田は原爆病院に再入院する。福田は、そこでの患者の会の不活発にがっかりし、「どろんとよんだような空気が充滿して、それが知らぬ間に人の心を蝕んでいくようであった」と記すまでになった。

これ以降、福田は、自らの生を制約する「原爆症」について多く記述する。月に一回は原爆病院に通い、「体さえ丈夫であったら、こんな泣きごとも言わず」にいられたが、「原爆症のために一生涯私が苦しむばかりでなく、私の身近にいる人間たちの人生まで苦しめるのであろうか。私は自分の体を呪った」と述べる。

1962年11月には、4回目の入院をし、「病気との闘いは私の常態だと考えるようになった。病気との闘いは自分の魂の闘いである」と考えるに至っている。「私は今、しなければならぬいろいろな仕事を持っているのだ。それを果たすために病気を手なづけながら生きねばならないのだ」。

こうした福田にとり、1964年3月、「ピキニ集会をめぐって全国各地の原水協は混乱をきたし、夏の原水禁世界大会は二つに分かれて開かれるという」「被爆者の私にはどう考えても納得出来ない重大な問題であった。「小さな力を捧げなければならない」と東京に行くが、高熱を出す。病がすぐにあらわれるのである。

いまひとつ、この時期の福田にとり、重要なことがある。記録すること＝代表することへの自覚である。(このあたりから、記述

は年ごとのまとめとなりゆき)1965年に「手が動くうちに、頭がもうろくしないうちに、是が非でも記録を書き上げようと決心した」。1967年には「今年こそは何としても被爆者援護法をかちとらねばならない。今年こそはどんなことがあっても原爆被災から現在に至るまでの生活記録を書き上げねばならない、と心に深く誓った」。「二十二年前の被爆当時から現在に至るまで、不安と絶望の中で生きてきた私の暗い歴史は、大小の差こそあれ、全被爆者の歴史だからである」と、使命感を持ち、代表性を意識する。「それを書かなければ戦争と原爆の恐ろしい実態を人々にわかしてもらえないのだ」。

そして、福田は、「私にはまた戦争が終っていない。私の体には戦争がなまなましく烙印されている。そして私の周囲の人たちにとつても戦争はまだ終わっていないのだ」と書きつけた。

1968年の記述として「私はこのごろ、一年を二つにわけて考えるようになって来た。新年と8月9日である。新しい年を迎えると、生きていると思ひ、8月9日には、なお生きていると感慨を新たにするのである」。この想いによつて、証言の表題が「われなお生きてあり」とされゆくことになる。

記録の目的は、「人類の最後の日を思わせたあの出来事を地獄をかい間みた人間として皆に知らせるのが私の義務」であるといひ、「原爆によつて百八十度の転換を余儀なくさせられ翻弄されつづけた自分の人生は、大小の差こそあれ、同じ運命を背負わされている全被爆者の問題として、不当な取り扱いを受けていることを皆に知ってもらおう」と、強く述べる。

福田は、この【第三部】の時期、数々の政治的文章を書いてゐる。『原子野にて』に所収された文章をみると、「私は父や母の死を犬死にさせぬためにも、そして私の子供が兵隊にとられないようにするために、断乎として反対します。もう悲惨な戦争犠牲者は、私達限りでたくさんです」（二度とだまされたくない）、初出は、『白い窓』1960年）などと、紋切り型の文章が多い。

しかし、そのクリシエの背後に込められた重みこそ、ここではみてとるべきであろう。政治的文章は紋切り型であるが、そこに至る過程を踏まえると紋切り型のいい方に含まれた重みがうかがえる。強い想いがあるだけに、表現したときには紋切り型に行きついてしまうということである。ことを換えれば、『われなお生きてあり』という証言により、クリシエの背後が見えて来る。紋切り型の文章の背景が、証言によつて照らし出された。

いまひとつ、『われなお生きてあり』には、のちの学習の「成果」が書き込まれていることに留意しなければならない。たとえば、ピキニ水爆の記述である。たしかに第五福竜丸の被曝は3月1日であるが、新聞に報道され、人びとがそのことを知るのは数週間後のことである。しかし、福田は3月1日に知つたかのように記している。すなわち、『われなお生きてあり』には、政治に目覚めた地点からの知見、後から調べたことが書き込まれている。サークルの仲間たちのなかでの開花があり、その時点からの政治的言語と証言記になつてゐることである。

あえていえば、『漂流』の個所の文体と逸脱の面白さが、『われなお生きてあり』では際だつてゐる。「被爆記」の部分、および政治的文章との差異がある。自己のなかでの推移が、見受けられる。

こうした福田に特筆すべきこととして、石田忠らの調査史（『生活史グループ』）と接点を有することが挙げられる。

2 石田忠『反原爆』（正統、未来社、1973、74年）

「長崎被爆者の生活史」と副題をもつ『反原爆』二冊、および『反原爆論集 I II』という『原爆体験の思想化』『原爆被害者援護法』（未来社、1986年）二冊の論集によつて、石田忠の営みをたどることができる。

一橋大学で教鞭をとつた社会学者・石田忠の営みが、被爆者の調査に関してもつ重みは、大きなものがある（前掲、浜日出夫・有末賢・竹村英樹『被爆者調査を読む』、濱谷正晴「原爆被害者問題の社会調査史」、石川敦志・橋本和孝・濱谷編『社会調査』ミネルヴァ書房、1994年、濱谷『原爆体験』岩波書店、2005年、など）。

石田は「面接調査」により、証言を練り上げ、「生活史」の叙述による、当事者の「証言」の意味付けと文脈づけをおこなつていった。

石田は「被爆体験の社会学的研究」を實踐し、「被爆者の生活と意識の調査」により被爆者の「苦悩」を解析し、原爆症を軸に据えた考察をおこなう。被爆者が抱え込むのは「不安」であり、「孤独と絶望と不信」であると石田はいい、「精神的荒廃」——①「人間破壊の過程の分析」——②「立ち上がる可能性とその契機となるべきものの追求」——③「抵抗」として分析した（『原爆被害者の「立場」』『思想』1968年8月）。

石田が直接に言及し分析するのは、被爆者である渡辺千恵子と

M子であるが、この分析には、あきらかに福田須磨子の影響もみてとれる。このことは、のちに触れよう。

石田は、まずは渡辺の手記「11年の証言」の分析をおこなう(「原爆」の告発者たることによつて彼女の「被爆体験」は一つの価値に転化する)。また、別の被爆者・M子に言及し、M子の「解かねばならない問題」を「M子さんにかわつて解明する」ことが社会科学者の任務であるとす。 「原爆被害者の問題」(「苦悩」)に接近しようとする社会科学者は、自らを原爆被害者の「立場」におくよりほかはない」とした。被爆者になり代わり、その論理をたどり、「思想の枠組み」を把握することを、社会科学者の課題とした。

こうした石田の姿勢は、倫理と分かち難く結びついている。石田は、「社会調査家の「立場」」(『未来』1970年9月)を記し、

被爆者が、被爆者たることを否定するのではなく、その確認の上になお生きようとする時、被害者にとつてそれを否定するよりほかはない対象の中に己の「立場」が含まれていることを見出すとすれば、その時こそ社会調査家の緊張は正にその全存在を包むものとなる。

と述べる。「立場」を重視する石田であるが、その「立場」が具体的であり、叙述的である点に営みの核心がある。「自らの生活体験の上に立つて問題を定式化し、これに対する説明を探索し、それに基づいて生きることによつてそれをためす。そして問題がたて直され、説明があらためられ、それは再び生活によつてためされる。このような歴史過程として、私たちは、被爆者の生

活史・精神史をとらえることができるのではないのか。それは絶え間なき問題追求の過程であり、壮烈なる検証の歴史である」。

石田は、かくして調査者/被調査者を「立場」という観点から把握し、前者が後者の「立場」に身を置くことをいう。「立場」のもたらす緊張のなかで、被爆者の「生活史」を再構成する。「全体としての被爆者の戦後史」を構想し、石田は、まずはひとりひとりの「被爆者の戦後史」を描くのである。「一つの生活史」を書くことが「生きられた生活史」の「再構成」であり、その「再構成」の枠組みは、「原爆体験の思想化」の型にかかわるものでなくてはならない、とされる(「原爆体験の思想化について」『長崎の証言』6号、1974年)。

ことばを換えれば、石田の意味する「体験と思想」とは、個別の生活史の分析、それによつて作成されたモデルの抽出となる。

「被爆者一人ひとりの体験は、それを一つの大きな情景に移していく作業の中で、主観的なもの、偶然的なもの捨象されていく」とし、「個人的体験の一般化」を図ることが、石田の叙述となりゆく(「体験と思想」『常緑樹』32号、1974年)。

とともに、明示的には語られていないが、石田は、量的収集により、このことが可能であるとの認識をもつ。

被爆者が自らの「立場」を見出すこととのあいだに緊張関係を持ち、「一人ひとりの体験」を「一つの大きな情景」に移し、「主観的なもの」「偶然的なもの」を「捨象」しての「生きられた生活史」の再構成。こうした、1970年代の社会科学者としての石田の認識と方法は、同時期に展開されていた、歴史学にお

ける民衆史研究との相似性をみてとることが出来る（民衆史研究については、とりあえず、成田龍一『歴史学のアラティヴ』校倉書房、2012年、を参照されたい。なお、私もまた、記述者の「〈立場〉」を重視しており、そのことは『歴史学のポジションナリティ』校倉書房、2006年、に記した）。

当事者の経験に寄り添い、当事者になり代わって叙述し、その経験の意味を解析するのである。そのために、民衆史研究もまた、たくさんの「民衆」の経験に直面し、大量の資料・史料を収集し「民衆の痛み」を追体験する。

分析の作業こそ、それぞれ社会的、歴史的なことを強く意識しており差異を有しているが、提出された叙述は、双方ともに当事者の物語としている。石田も民衆史研究も、ともに当事者の発言を「証言」として扱う点も共通している。

1970年前後の経験の記述として、（社会学における）石田と、（歴史学における）民衆史研究はあらたな地歩を築いていた。「証言」の社会学と「証言」の歴史学。では、この石田と、福田須磨子とが遭遇したとき、どのような展開があつたらうか。

石田は、福田の経験に関しても同様に、その「定式化」を探るが、福田のばあいは、自ら書いたものがすでにあり、福田自身の解釈と石田の解釈との相克となる。

石田は、『われなお生きてあり』【第三部】を価値化し、福田を「〈漂流〉」の型から「〈抵抗〉」の型への移行」として把握する。実際には、【第二部】が面白く重要であるのだが、石田はそこには目を向けない……。

こうした石田は、「反原爆の〈立場〉——福田須磨子さんの戦後史」（『反原爆』所収）を記す。相互の影響とすることを考えたとき、ここには微妙な問題が孕まれる。

すなわち、石田による「面接調査」は、『われなお生きてあり』刊行の前である（ただ、福田は、すでに同書を書き上げていた）。「生きる」（1965年）をはじめとする、いくつかの福田の「生活記録」が、石田のインタビュウの素材だが、「反原爆の〈立場〉」では「われなお生きてあり」も用いている。他方、福田が石田と接触したことにより、『われなお生きてあり』の草稿を修正したかどうか——石田から影響を受けたか否かは、いまの段階では不明である。今後の調査に待ちたい。

本稿では、石田の論考は、（石田による）福田須磨子の「生活史」の叙述となり、生活記録の再構成となることを踏まえ、ここに「証言」の力学を探っていくことにする。

石田は、（先述のように）福田の経験のなから「〈漂流〉」と「〈抵抗〉」を読みとる。福田における1955年の意味を重視し、福田の生活史の時期区分（石田は、二つに区分）をおこなう。石田の叙述は、「〈原爆〉」は、「〈むごい死〉」と「〈むごい生〉」として「〈体験〉」される→己を「二つの自我」に引き裂き、「精神的閉塞」と「被害者意識」をもたらす→自らの「被爆者の存在性」の克服のほかに、「〈苦悩〉」からの解放はないと自覚する→「〈漂流〉」から「〈抵抗〉」への「飛躍」がなされる、との把握となる。

石田は、

福田さんと「鈴木」、そして「岩下」との三人の世界の生成

とその崩壊の歴史の中に、彼女の戦後史の一つの契機を析出することができる。いま一つの契機は福田さんが被爆者問題や原水禁運動にかかわり、戦後二十年の生活記録を完成させる過程の中に、これを見出すことができるであろう。これら二つの過程は福田さんが「原爆」とのたかひのなかで描いた死と回生の軌跡に他ならないからである。

とまとめていく。家族形成の試みと挫折として、「岩下」「鈴木」を把握するが、原爆は家族・地域を破壊した、という石田の認識が背後にある。

同時に、石田は、「〈立場〉の絶対性」をいい、ここから「〈政治〉」が肯定的に導き出される——福田は「新しい人間集団」のなかに、自分をおくことよって、そこにおける「自分」のもつ意味」を感じることができ、「自分の〈立場〉のもつ意味」を認識することができた、と石田は福田を描く。

そして、石田は、第一に、福田がまずは「自分の〈現実〉」をそのまま受けとめようとする「態度」を指摘する。「〈現実〉」から目をそむけたり、逃げ出したりする態度の否定をいう。そして、第二に「自分の社会的役割の認識」を福田がもつとした。「自分が置かれている〈立場〉」それ自体がもつ意味の自覚」であり、さらに「両者の間の関係」を福田は意識していると考察する。

こうして、石田は「原水禁大会」はもはや福田にとり「外の世界」のことでなく、「内面」と結びついたと評価する。また、福田は「生きる不安と苦しみの現実」が、「〈政治〉」によってもたらされたも

のであると知ったといい、福田の詩集『ひとりごと』を分析する。（福田が『生きる』に記した）「世界の片隅に追いやられている姿」は、まさに「〈政治〉」の表出」にほかならず、福田の「想像力」は、ついに「〈政治〉」をとらえたとするのである。

被爆者の「苦悩」の最奥」は「自らの〈原爆体験〉」の意味を確定することができないということ」であろうと、石田はいう。

そのゆえに、福田に即しながら、石田はさらに、ことばを重ねる——「〈現実世界〉への〈抵抗〉」とは、「〈原爆体験〉」の意味の確定」と、「生きる不安と苦しさ」からの解放」とが、同時に可能となるような「新しい〈現実世界〉」社会体制への志向とその模索」であると。石田は、福田の戦後史——「〈抵抗〉」に、この点を読みとろうとしている。

こうした石田の議論は、「死者」たちとの関係に及ぶ。「死者の〈立場〉」と「生者の〈立場〉」。石田は、「死者」を「私たち生者」はいかにとらえなければならないのか、と問う。この問いを踏まえずしては、自らの思想の「体系的完成」はできないという。福田がいう「原爆で死なされた学徒たち」という認識を導きとし、福田は彼らに「最も純粋な被爆者」を見た。と石田は解釈する。すなわち、彼らの「問い」こそ「被爆者の〈立場〉」を「最も純粋に表出する」と福田は考えたといい、「死者の〈立場〉」を「明証」することに、生者の「〈立場〉」を照らし出す」とした。

「死者の〈立場〉」を追究していった究極に「生者の〈立場〉」がみられ、石田は、これこそが福田の方法であるとす。「何故「僕たち」はかくも「むごい死」を死ななければならなかったの

か、という「学徒たち」の声は、何故私たちはかくも（むごい生）を生きなければならぬのか、という生存被爆者たちの声と、こ
だましあっているのではないだろうか」とするのである。

「死者の〈立場〉」から照らしだされる「生者の〈立場〉」は、
当事者とそれになり代わって語る者、被調査者と調査者のあいだ
にある非対称的関係の原型であるのだが、石田はむしろ、そこに
相似性を見出している。ことばを換えれば、「生者の〈立場〉」
を優位におき、そこから「死者の〈立場〉」へ赴くことを主張し
ている。石田における、方法としての「〈立場〉」は、その非対称
性ではなく、連続性と相似性に行きつくこととなった。

こうした営みをおこなない、「戦後二十八年にわたる被爆者の
〈生〉」は、彼らの引き続く〈原爆体験〉の歴史である。この歴史
の中に〈原爆〉はその全き姿を演出する。被爆者の〈生〉の〈苦
悩〉が即ちそれである。その〈苦悩〉の故に被爆者は〈原爆〉を
否定せざるを得ない。それが〈反原爆〉の思想である」との認識
を、石田は持つに至る（『序文』『反原爆』）。

この点は、歴史学における民衆史研究においても同様で、歴史
家―語り手―「私」のなかに「民衆」を見出し、「私のなかの民
衆（性）」や「民衆の一員としての「私」」が語られる。「民衆」
の一員としての歴史家（＝「私」）という立場であり、連続性と
相似性の強調である。1970年代の当事者の「証言」をめぐつ
ての認識と作法が、ここにかがえる。

むしろ、非対称性にかかわっての論点にも、石田は自覚的であ
る。当事者と調査者（社会学者）の相克として表出する事態を、
石田は一般化し、ここでの二重の相克を指摘する。すなわち、「私

の描くことのできる福田さんの戦後史は、もとより彼女自身によ
るそれとはちがったものになるかも知れない。しかし、そのこ
とによって、福田とのあいだに「本当の意味での〈対話〉」をも
つことができるであろうとした。

そして、「生活史」をめぐつてのかかる営みと手続きを経て、
石田は「原爆体験」のテーゼ化を図る。

「原爆」のもつた最大の意味は、それが原爆否定の思想
を生み出したというところに在る。この思想形成の必然は被
爆者の〈生〉そのものの中に在る」（『序文』『反原爆』）。

さらに石田は、「原爆体験」とは「原爆」が人間に対してもつ
意味を確定しようとする思想的営為にはかならない」とし、自らの
営みを意味づける。これ自身は、いくらか当たり前にみえるやもし
れない。しかし、石田がこれを導きたすまでの過程と手続き、調査
と叙述が背後にあり、そのことによってもたらされた認識に他なら
ず、そのことを考えあわせるとき、説得力を有している。

いくつかの石田忠による命題を掲げてみよう。

A 私たちは「思想化された〈原爆〉」に打たれるがゆえに、「被
爆者の〈原爆体験〉」は「強い衝撃」を与える。「私たちは被爆者
にふれることによって被爆するのである」。

B 「原爆」に関する事実や事件を知ることによってもまた、
私たちは衝撃を受ける。それは、これらに基づいて、私たちもま
た「原爆」を体験するところがあるから。

C 被爆者における「漂流」から「抵抗」への飛躍は、「主体

としての自己形成」であり、「(反原爆)の思想」である

D 「私たちはすべてヒロシマとナガサキの生存者である」

E 今日に生きる思想は、それが「(原爆体験)」を欠如するとき、そこに「空白」を残さざるを得ない。「(原爆体験)の継承」によって、これを埋めることができ、私たちもまた「(原爆)」を「体験」しなければならない。

F 「(漂流)」が「(原爆)」による人間破壊」を「象徴」するとすれば、それに抗って「肉体的・道徳的再生を遂げようとする主体的な営為」が「(抵抗)」である。

被爆者への聞き取りのなかでの考察とともに、いや、それ以上に聞き取りによってあらたなテキストをつくり、解釈を加え意味を与えていく作業が、石田の実践である。すなわち、石田は「生活史」として聞きとり―解釈の作業をまとめあげ、「生活史」というテキストの編著に携わる。これが石田の表出ということになる。「(立場)」の自覚と相克が、ここに結晶する。

『反原爆』は、こうして「長崎被爆者の生活史」(副題)を描き、石田(およびそのグループ)の様々な意味での集大成となるが、石田忠「編著」として提供されている。石田と被爆者の双方による共同作業として著された生活史であるという主張が、「著」の文字として表現される。石田と被爆者が、著者―被記述者ではなく、対等の関係をもつと意図している。ライフヒストリーなど、社会学分野での聞き取りのテキスト化のばあいにもみられる作法でもある(座談会 個人史研究の現在、そしてエゴ・ドキュメントへ)『歴史評論』2015年1月)。

この営みにおいて、石田は実証的な補足はいちいちしない。石田の「調査者の(立場)」は鮮明であるが、たとえば(福田が共に生活していた)「岩下」が朝鮮人であることは触れられない。石田は、福田から証言として聞きとり、意味づけと解釈をおこなうが、補正や訂正、注釈は禁欲している。

そのため、というほかはないが、石田による生活史・叙述からは、福田須磨子における朝鮮という問題項の欠落が生じる。「原爆体験」において、朝鮮という事項―(やや強引に一般化すれば)加害の問題系はいかに入り込むのか、という論点はここからは出てこない。複数の倫理的領域があるなか、加害の筋道がどのようにでてくるのかは、石田の「生活史」からは難しい。

他方、この営みのなかで、聞き書きがテキストとして固定され、福田が自らを「被爆者」として総括し、「抵抗」への「飛躍」を果たしたことが際立つことになる。生活史・叙述と原爆文学の1970年代を探るといって、本稿の文脈からいえば、(石田は回避しようとしているが、それにもかかわらず)生活史・叙述のなかに、非対称性が組み込まれるということでもある。

複数のアイデンティティをもつ福田須磨子が、「被爆者」という存在規定に帰着し、その「立場」から「証言」を再構成したことが、全面的に追認される。

おわりに――「証言」をめぐる力学

「証言」の時代である1970年代。この時期に、「証言」の領域が定められ、「証言」のもつ重みがもたらされた。そのこと

に大きな役割を果たした石田忠のばあい、「(立場)の絶対性」から「証言」を扱い、被爆者である当事者の生活史を再構成する。石田は多数の被爆者からの聞き取りを行い、かかる「(立場)」を見出し、ここから叙述がなされている。

しかし、翻ってみれば、個々のものにとっては、さきに「(立場)」があるのではない。加えて、石田忠は、「悔恨共同体」の一員として、「政治」の優位をいい、生活からの「政治」の発見という方向の価値化を重視する。石田の叙述は、抵抗に行きつき、政治に参加する福田の「(立場)」からの叙述となりゆく。聞き取りの対象とされた者——福田須磨子からすれば、自らの経験の二重の障害と疎外がここに生じることとなる。

しかし、たまたま福田は、石田の聞き取りに先行して、自らの記述をなしていた。そのため、石田の解釈との相克が明らかにになったが、他の被爆者はその葛藤・確執・相克が表示されないまま、①石田が編著者となる生活史・テキストが、②「証言」として提供されることとなる。そして、こうした手続きを踏むがゆえに、③「証言」に正統性が与えられる。いったん「証言」が提供されれば、正統性を与えられたものとして、④その「証言」が解釈されることとなる。「証言の時代」は、かようにしてはじまりゆく。

くり返し触れるように、ことは社会学にとどまらない。たとえば歴史学においても同様で、かかる葛藤・相克は、民衆史研究と「証言」(史料)との関係でもある。「民衆の声」として提供される「証言」(集)は、たとえ史料として記述されたものであっても、歴史家が介入するときは歴史家の解釈と評価を経たものとなっており、それに基づく歴史叙述がなされゆくことになる。

「証言」における、聞きとる主体/聞きとられる対象という非対称的關係。この関係に組み込まれて提供される「証言」というテキスト。しかし、この「証言」において、当事者の語りが絶対視され、当事者の認識が議論される。ここにもまた、二重の障害と疎外がある。

福田須磨子と石田忠の關係は、福田が先行して自らの解釈に基づくテキスト(『生きる』、『われなお生きてあり』)を作成していたがゆえに、さらに入り組んだものとなっている。福田と石田の相補・共犯・包含、あるいは反撥……。

1970年代の原爆の語りの位相と構造は「証言」という領域を創出したが、「証言」をめぐるのはかくも複雑である。「証言」のなかの力学、「証言」に働く力学が、存在している。

当事者として死者が問題化され、当事者性が議論されるに至るのは、かかる事態を自覚するがゆえの認識であるが、本稿の主題からするときには、あらためて被爆者の「証言」とはいつたい何であるかが問われることとなる。そして、これまで生活史・叙述としてなされた営みを、この観点から解釈しなおし、解き放つとき、あらたな「原爆経験」の表出が可能となるように思う。

本稿は、いまだ途上のものである。なによりも、『われなお生きてあり』に先行する福田の述作『生きる』との比較検討がなされなければならない。この点において、本稿はまだ未定であることをお詫びしたい。